英語に親しみを感じ，
生き生きと学びに向かう生徒の育成

－中学１年生英語科「学びと実生活をつなぐＣＬＩＬ実践」を通して－

長久手市立南中学校　教諭　大棗　智子

＜研究の概要＞

教科書の知識を身に付けることにとどまるのではなく，学びを実生活へとつなぐ活動をＣＬＩＬ（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）を通して継続的に行った。この活動を通して，学習事項の理解を深めるとともに，英語に親しみを感じ，生き生きと学習に向かう生徒の育成を目指した。

＜検索用キーワード＞
ＣＬＩＬ　内容言語統合型学習　教科横断型授業　対話活動　タブレット端末　中学校英語

１　研究主題

英語に親しみを感じ，生き生きと学びに向かう生徒の育成

－中学１年生英語科「学びと実生活をつなぐＣＬＩＬ実践」を通して－

２　はじめに

英語の教員でありながら，私自身は学生時代英語の「勉強」はあまり好きではなかった。よく仮定法の説明で使われる，“If I were a bird, I could fly.”(もしも私が鳥だったなら，飛ぶことができるだろう。)などの例文は，実際の会話の中で使う機会はあまりなく，共感できず，理解につながらなかった。

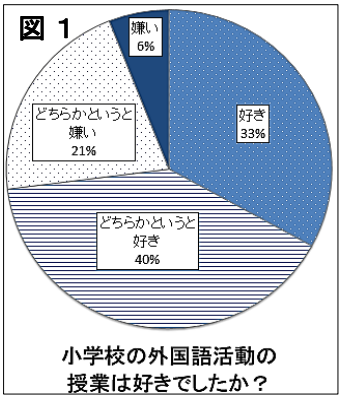
“Would you know my name if I saw you in heaven?”
（もしも天国で会えたなら，ぼくを覚えていてくれるだろうか？）

これは 1992 年にリリースされた，エリック・クラプトンの楽曲 “Tears in Heaven” の冒頭の一節だ。リリースの前年，彼は４歳の息子を不慮の事故で亡くした。「もしも天国で会えたなら」という息子への思いが歌詞に何度も繰り返される(Clapton 1992)。

“If today were the last day of my life, would I wanna do what I’m about to do today?”
（もし今日がぼくの人生最後の日だとしたら，今日やろうとしていることをしたいだろうか？）

この言葉は,スティーブ・ジョブズが 2005 年に米スタンフォード大学の卒業式のスピーチで紹介したものである(TED 2008)。すい臓がんと診断された彼は，毎朝鏡に向かってこの言葉を自分自身に投げかけ，１日をスタートした。先述のような現実味にやや欠ける教科書の例文ではなく，こうした経験に基づく思いのこもった言葉に出会い，私は仮定法をようやく理解することができた。このような自身の経験から，人は生身の人間の「リアル」な言葉にこそ心動かされ,理解が深まるのではないかと考えたのが本研究の出発点である。

４月の生徒への意識調査では，小学校の外国語活動の授業に対して多くは肯定的な意見だった。しかし否定的な意見の生徒も４分の１以上見られた(**図１**)。否定的な意見の生徒の中には,「ただ繰り返し同じことを言うだけだから。」「実際に使うことがないから。」「何を言っているかわからないから。」というものがあった。外国語活動の授業の実施により，英語の聞き取りや発話への抵抗感が少なくなった生徒が増えるなど，プラスの変容も多くの場面で見られる。その一方，反復練習やゲームなどの思考力を伴わない単調な活動の繰り返しは，生徒の知的好奇心を満たすことができず，学習意欲の向上や知識の定着につながっていないのではないかと感じた。深い学びに至るためには，習得・活用・探究という学びの過程が重要であり，学びと実生活をつなぐことが不可欠であると考える。そこで，実際の生活場面で使われている英語にふれさせる活動を多く取り入れ,「そうやって使うんだ，英語って楽しい。もっと知りたい，使いたい。」と感じさせることで，高い意欲，より深い学びへつなげていきたいと考え，本研究の主題を設定した。



３　研究のねらい

(1)　目指す生徒像

英語に親しみを感じ，生き生きと学びに向かう生徒

(2) 研究の仮説

ＣＬＩＬを用いて学びと実生活をつなぐ活動を行えば，学習内容の理解を助け，生徒は「英語の楽しさ」を実感し，自ら進んで学ぼうとする意欲が高まるであろう。

(3) 研究構想図

4　研究の計画

(1) 研究の対象

令和３年度　中学１年生　５クラス　164 名（男子 86 名，女子 78 名）

(2) 研究の手立て

・ＣＬＩＬを取り入れた活動

ＣＬＩＬ（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）は，内容（社会や理科などの教科ないしは時事問題や異文化理解などのトピック）と言語（外国語）の両方をあわせて教育する外国語の学習方法（光村教育図書　2018）で，思考力を伴う探究的な活動が特徴である。ＣＬＩＬを行う上で次のような利点が挙げられている。

・オーセンティックな教材により，学習への動機づけが高まる。
・意味のある豊かなインプットが与えられる。
・深い思考を伴うので，言語知識が記憶に定着しやすい。（和泉他　2012）

上記のことから，ＣＬＩＬは学びと実生活をつなぎ，目指す生徒像に迫る効果的な手立てであると考え，本研究の中核として取り入れることとした。以下にＣＬＩＬを取り入れた活動の実践計画を示す。

(3) ＣＬＩＬを取り入れた学びと実生活をつなぐ活動の実践計画

実践１（英語＋ α ）
新出文型学習時，指導者オリジナルコーナー“I am a translator”(私は翻訳家)を設け，オーセンティックな素材をもとに学びと実生活をつなぐ活動を継続的に行う。
実践２(英語＋社会)
－ What time is it in the world now?「地球の裏側は今何時！？」－
インターネットで世界各地の時刻を調べ，英語で伝え合う対話活動に取り組む。
実践３(英語＋理科)
－ How’s the weather today? 「北半球と南半球，ほんとに季節は逆！？」－
英語を用いて海外のウェブページで世界各地の天気，気温を調べる活動に取り組む。
実践４(英語＋国語・音楽)
オリジナルコーナー特別版，“We are translators”(私たちは翻訳家)で，学習事項を用いてクラス全員で協力して洋楽の翻訳およびリリックビデオの制作に取り組む。

(4) 仮説検証の方法
①授業実践の記録
②授業後の生徒の振り返り
③生徒へのアンケート

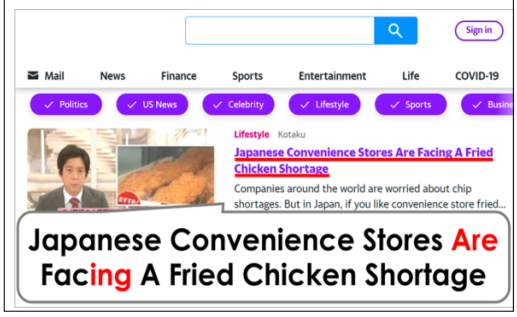
５　研究の実際と考察

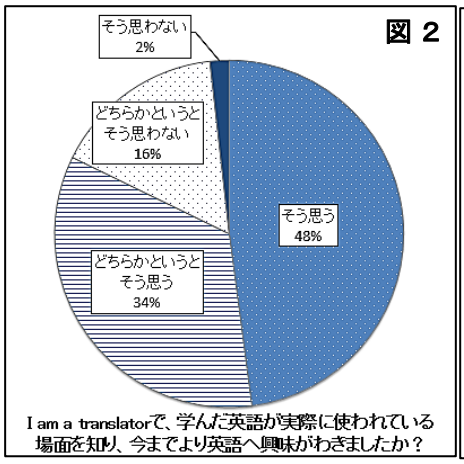
(1) 実践１（英語＋ α ）
新出文型学習時，指導者オリジナルコーナー“I am a translator”(私は翻訳家)を設定し，オーセンティックな素材をもとに，学びと実生活をつなぐ活動を継続的に行った。このコーナーでは，映画のセリフや歌詞，ニュースやＳＮＳの投稿など，学習内容が扱われている様々な場面を紹介し，生徒たちは翻訳家になったつもりで英語を日本語に翻訳したり，日本語を英語に翻訳したりする活動を行った。扱う素材に応じて効果的に学びを深められる場面を考え，導入時や発展的学習時などに柔軟に活動を行った。
複数形の導入時には，生徒にとって身近な，一度は目にしたことのあるディズニー作品，「101 匹わんちゃん」のタイトルを英語で考えさせた。また，指示代名詞の英文 this is～/ that is～の発展的学習時には，ネコが他人の家でくつろぐ写真とともに投稿された，“This is my cat, that’s not my house.”という英文を紹介した。これは授業実践時期に実際にアメリカで話題になっていたＳＮＳ投稿で，英語母語話者が発する生の英文を読ませることに挑戦させた

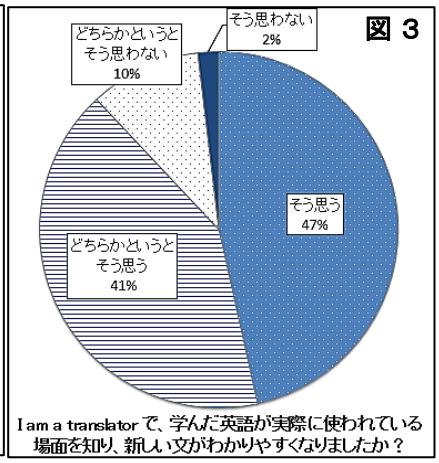
そのほかにも，現在進行形の発展的学習として，海外の検索エンジンのトップページで扱われた日本についてのニュースを読むなど，様々な活動を取り入れた（**資料１**）。

生徒の多くは，学習したばかりの英語が教科書の中だけでなく実生活につながっていることや，身近な場所でも使われていることを発見し，高い関心をもっていた。このことは，アンケートで８割以上の生徒が今までよりも英語に興味がわいたと答えていることから分かる（**図２**）。さらに，約９割の生徒がこうした活動により，新出文が分かりやすくなったと答えた（**図３**）。これらのことから，この実践は生徒たちの英語への興味を高め，学習内容をより深く理解することに対して有効に働いたことが読み取れる。

資料１　〈現在進行形の発展的学習〉



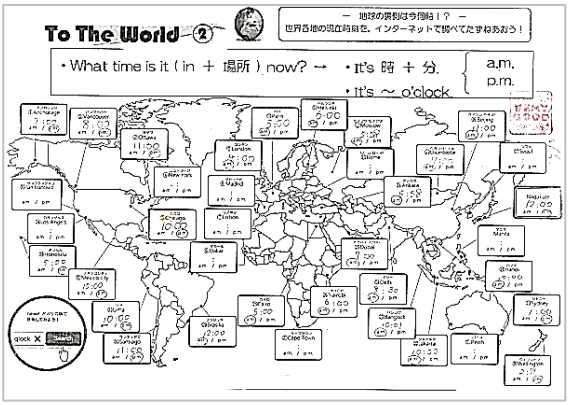




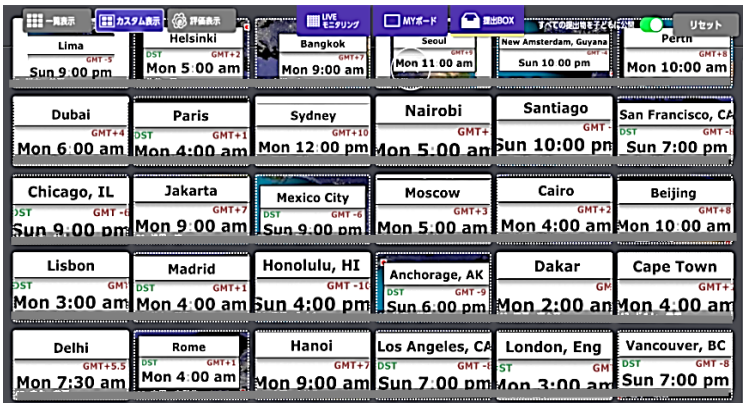
(2)　実践２（英語＋社会）

Unit４では，日本の中学生がニュージーランドの生徒とインターネット電話を通じて会話をする場面が扱われている。その会話の中で，時刻や季節についてふれられている。その発展的学習として，タブレット端末を用いてインターネットで世界各地の時刻を調べ，英語で伝え合う対話活動に取り組んだ。一人一都市の時刻を調べ，対話活動に取り組み，情報を交換した（**資料２**）。また，調べた都市の時刻をスクリーンショットしてタブレット端末で共有した（**資料３**）。授業の終末には，ワークシートにはない都市の現在時刻を答えさせ，学習事項が身についているか確認した。実際の日常会話のように即興で答えられた生徒がとても多かった。

資料２　〈調べた時刻を対話活動で交換〉



資料３　〈調べた時刻をタブレット端末で共有〉



※日本時間午前 11 時の世界の時刻

ついての知識を今回の実践に結びつけて考え，世界の時刻を地球規模で俯瞰的に捉えることにより，さらに興味が高まった様子だった。また，新出文を用いて同じ会話を繰り返したことにより，自信をもって対話活動を行うなど，学習事項の深い定着が見られた(**資料４**)。

資料４　〈授業後の生徒の振り返り〉

・場所によって時刻が違ったりしていてすごくおもしろかった。時差は社会でも学んだがさらに興味がわいた。自分たちが学校にいる時に，まだ真夜中の国があるんだなと考えることができてすごく楽しかった。

・世界では，まだ朝を迎えていないところもあったり，朝を迎えるのが早い国がありました。時間を聞く，答えるはもうばっちりできると思います。社会の勉強にもなるので良いなと思いました。

(3) 実践３(英語＋理科)

実践２に引き続き Unit４の発展的学習として，英語を用いて海外のウェブページで世界の天気・気温を調べる活動を行った(**資料５**)。海外の天気や気温を調べることは日本語のウェブページでも可能だが，現地の人が実際に目にしている本物の情報を生徒たちに手に入れて欲しいと考えた。そのため，それぞれの国の検索エンジントップページのメニューから適切な情報を探し出し，調べるように指示した。

資料５　〈世界の天気・気温〉

※2021 年 7 月 19 日の世界の天気・気温

東京の最高気温35℃に対してシドニーの最低気温は４℃

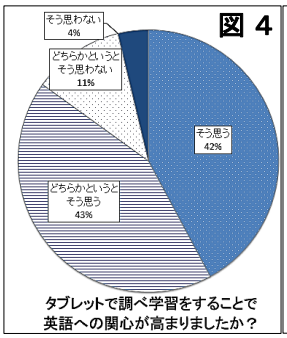
生徒のほとんどは，英語のウェブページの中から，「menu」や「weather」，都市名など自分の知っている英単語から推測して，適切な情報を読み取ることができた。また，国によっては気温がとても高く表記されることに驚き，摂氏と華氏の気温の表記の違いに気付くなど，新しい学びもあった。さらに，北半球と南半球の季節が実際に反対になっていることを自分が調べた情報から改めて認識したり，赤道に近い国は本当に気温が高いということを実感したりすることができ，学んだことを実生活につないで捉えることができていた(**資料６**)。

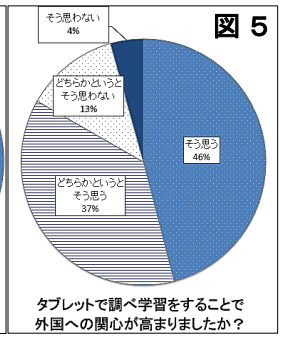
資料６　〈授業後の生徒の振り返り〉

・世界の天気や気温は，それぞれ全然違っていてとてもおどろいたけど，現地の人々の見ている情報を見ることができてとてもおもしろかったです。

・日本は℃で表しているけれど，外国などでは℉で表すことを初めて知りました。アメリカの天気を見た時に 64°と書いてあったのでとても驚いたけれど，表し方が違ったので日本と気温は同じくらいでした。また，南半球は本当に冬だということが分かりました。

実践後のアンケートでは，タブレット端末を使った調べ学習をすることにより，英語への関心が高まった，どちらかというと高まったと答えた生徒の割合は 85%だった(**図４**)。またこうした取り組みにより，外国への関心が高まった，どちらかというと高まったと答えた生徒の割合は 83%であった(**図５**)。これらのことから，この実践を通して，生徒たちは英語





を学ぶことに興味や関心をもつことにとどまらず，社会や世界とのかかわりの中で，学んだことをさらに深く知ろうという気持ちが高まったということが読み取れる。

(4) 実践４(英語＋国語・音楽)

指導者オリジナルコーナー特別版，“We are translators”(私たちは翻訳家)として，学習事項を用いてクラス全員で協力して洋楽の翻訳およびリリックビデオの制作に取り組んだ。Unit８で学習した，現在進行形が歌詞の中で何度も繰り返される，ロッド・スチュアートの代表曲 “Sailing”を素材として選んだ。この曲は中学校１年生英語の教科書にも掲載されている。

翻訳，特に歌詞の意訳にチャレンジするのはほとんどの生徒は初めての経験だったので，簡単に説明をしてから活動を行った。翻訳の簡単な例として，１人称“Ｉ”だけでも，性別やキャラクターに合わせて何通りも意訳ができることに気づかせた。また，映画などの実例を挙げながら，直訳と意訳の違いについて理解が深まるように工夫した(**資料７**)。さらに，受け手に深い感動や共感を与えるためには，さまざまな要素を汲み取り,「自分の言葉」にすることが必要だということを伝え，生徒たちが自信をもって英語の歌詞を自分たちの言葉に翻訳できるようにした。

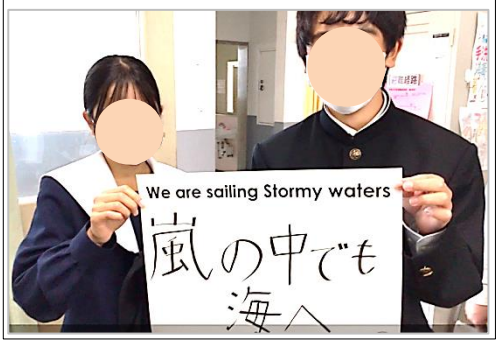
資料７　〈意訳の実例 〉

“I’m the king of the world!”

直訳「私は世界の王様です。」

意訳「世界は俺のものだ！」

資料８　〈オリジナル歌詞 〉



具体的な手順としては，歌詞を 16 分割して担当箇所を振り分け，短い歌詞をペアで協力して翻訳させた。その際,「自分の言葉」で翻訳できるように，タブレット端末ではなく辞書を使用させた。また，担当箇所と前後の歌詞がスムーズにつながるように考えさせた。生徒たちは直訳から意訳を考え，歌詞を自分たちの言葉にしようと一生懸命考えたり，前後のペアと相談したりしてクラス全員で協力して翻訳作業をすることができた。その後，生徒の思いがより伝わるように，翻訳した歌詞を生徒の文字でワークシートに記入させ，顔写真と共にタブレット端末で撮影させた(**資料８**)。それらを指導者のタブレット端末上でつなぎ合わせ，クラスごとのオリジナルリリックビデオを完成させることができた。

授業後の生徒の振り返りからは，学習事項と歌詞を結びつけて理解し，歌詞への思いを汲み取り自分の言葉に翻訳しようとしていたことが分かる。また，協力して活動する中で，学びを深めることができた生徒も多くいた(**資料９**)。このように，学習事項を実生活の中に発見し，英語を学ぶ楽しさを感じながら理解を深められた生徒が多かったことから,この実践が目指す生徒像に近づく有効な手立てだったと考えられる。

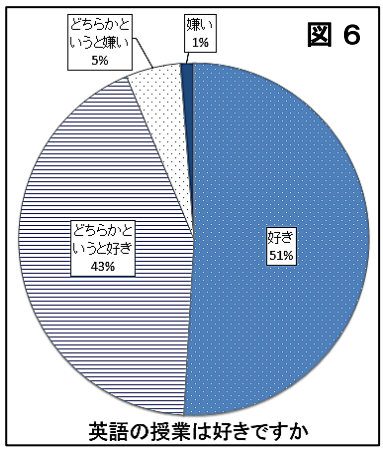
資料９　〈授業後の生徒の振り返り 〉

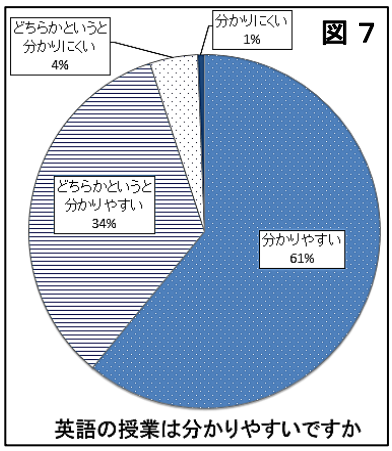
- 自分なりの翻訳ができて楽しかったです。今まで知らなかった単語を知ることができました。私が翻訳した文は，現在進行形の文で,「今」を使わずに現在のことを表しました。
- 最初，英語の直訳も分からなくて困っていたけれど，友だちの意見を聞いてとても良い文ができました。完成もとても良かったです。楽しかったです！
- 直訳ではなく意訳をすることで，感情のこもったセリフに仕上がりました。一つの英文からたくさんの文を考えて，その中からよりよいものを選びました。
- 今までは直訳ばかりで意訳したことはありませんでしたが，やってみてとても楽しかったです。一文を訳すために，これまでの流れ，そしてこれからの流れを全て知ることが大切だと知り，翻訳家の大変さとともに楽しさが分かりました。
- 前後の人とつながるように考えたのがすごく楽しかった。

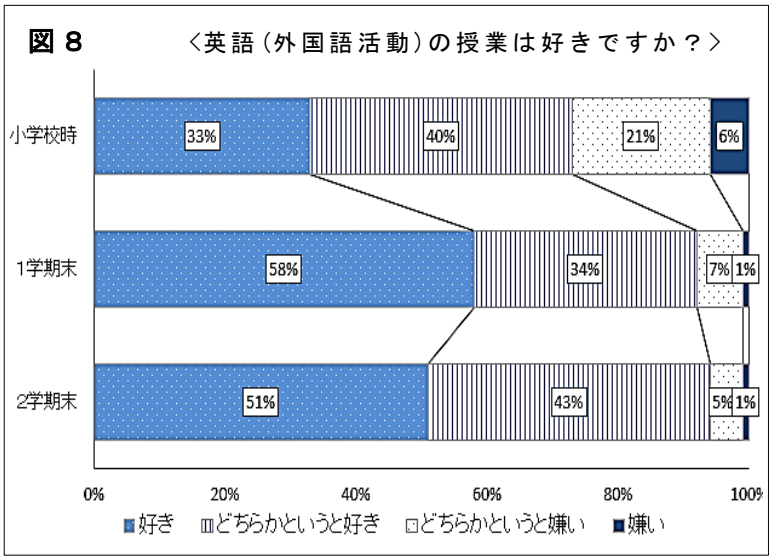
(5) 仮説に対する検証

実践後のアンケートでは，英語の授業は分かりやすい，どちらかというと分かりやすいと答えた生徒の割合は95%だった(**図６**)。また，先述の通り，実践により新しい文が分かりやすくなったと答えた生徒の割合が高かったことからも，ＣＬＩＬを取り入れた活動は，学習内容の理解を助け，有効に働いたと判断できる。

また,94%の生徒が英語の授業が好き,どちらかというと好きと答えた(**図７**)。さらに，その割合は実践を進めるうちに高まっていったことが分かる(**図８**)。このことから，実践を進める中で,生徒たちが主体的に学びに向かう姿勢が養われていったと考えられる。







また，アンケートでは，英語に対して好き,どちらかというと好き,という好意的な意見が多かったことから,生徒たちの多くが英語に親しみを感じていることが読み取れた。一方，意見の中には，「英語」そのものに対しては否定的だが,英語の「授業」は好きというギャップも見られた。このような意見の生徒も一定の割合で見られたが,全体を通して考えると実践を通して目指す生徒像「英語に親しみを感じ,生き生きと学びに向かう生徒」に迫ることができたと判断でき,仮説は有効であったと考える。

６　研究の成果

ＣＬＩＬを用いて学びと実生活をつなぐ活動を継続的に行ったことにより，教科書の文の理解にとどまるだけでなく，生徒自身が「そうやって使うんだ。」と興味をもったことにより，新出文のより深い理解につながったことは本研究の成果と考える。

また，この活動を通して，教科書で学んだことが実生活にあふれていることに気付き，英語に対しての興味・関心が高まったことがアンケートから分かった。さらに，その姿勢は授業以外の様々な場面にも表れており,「英語の歌を家でも聞いてみた。」「映画館でいつもは吹き替えだけど，字幕で見てみた。」などの積極的な様子が多く見られた。

このように,知識を身につけることにとどまらず,実生活においても英語に興味をもち，より深く知りたいという気持ちが高まっている様子から，生徒が「英語の楽しさ」を実感し，自ら進んで学ぼうとする意欲を高め，生徒一人一人が本研究の目指す生徒像である，「英語に親しみを感じ，生き生きと学びに向かう生徒」に近づくことができたことが最大の成果であると考える。

７　今後の課題

実践を行った５クラス中２クラスは 100％の生徒が英語の授業を好き，どちらかというと好きと答えており，全体で見ても 94％の生徒が英語の授業に対して肯定的な意見をもっている。しかし，「英語」自体に対しては，嫌い，どちらかというと嫌いという否定的な意見もあり，「英語の授業」は好きだが「英語」そのものは好きではないという生徒が一定の割合いるというギャップが見られる。英語の授業は分かりやすい，どちらかいうと分かりやすいと答えた生徒の割合は 95％であることから，否定的な意見の背景には，授業では理解できても，ペーパーベースのテストになると点が取れない，などのつまずきの積み重ねが一因としてあげられるのではないかと考える。そのため，今後は基礎の定着を確実に進められるような，きめ細やかな支援をしていく必要があると感じた。また，この結果をどのようにしたら生徒たちを英語好きにできるかを考えるための新たなきっかけとして捉え，前向きに生かしていきたい。

また，学びと実生活をつなぐ活動として，ＣＬＩＬを取り入れたが，発達段階に応じた素材の選定ができていたか，英語の魅力を十分に伝えられるものだったか，学習内容との関連性は適切だったかなどを再検討する必要があると感じた。関連して，ＣＬＩＬの素材選びは，時間的にも知識的にも英語の母語話者ではない指導者自身で進めるには限りがあるため，ＡＬＴなどに協力を仰ぎ，オーセンティックな素材にアクセスできるような手立てを考えていきたい。

さらに，日本国内でそのような英語にふれる場面は，読み取り，聞き取りなど受動的になりがちである。そのため，発信面でも生のやりとりができるような場面が設定できるとよいと感じる。そのためには基礎の定着，とりわけ話すこと，書くことの強化ができるような指導をしていく必要があると感じた。

８　実践を終えて

教員となり 10 年が過ぎ改めて振り返ってみると，初任者の頃から教科書を教えることにとどめるのではなく，どのようにしたら実生活につなげられるかを常に模索してきた。

昨年度，中堅教諭等資質向上研修後期を受講し，特定課題研究というきっかけを得て，ＣＬＩＬという指導方法を今まで以上に突き詰めて試みることができ，とても有意義な機会となった。ＣＬＩＬという考え方を知ったのは５年ほど前だが，自分自身の勉強不足な面もあり，まさに暗中模索の中実践を進めた。

研究仮説通りにいかなかった部分もあるが，学びの多い充実した実践となった。また，初任者の頃から欠かさず続けてきた毎学期のアンケートでは，英語に対して否定的な意見の生徒が思ったよりも多かった。しかし，この結果をどのようにしたら生徒たちを英語好きにできるかを考えるための新たなきっかけとして捉え，前向きに生かしていきたい。

最後に，私がモットーとしている言葉に，“Book-smart doesn’t always mean street-smart.” というものがある。これは，アメリカのＳＮＳ上で出会った言葉で，《「書物上の知識がある」ということは，必ずしも「生きていく賢さがある」とは限らない。》という意味の言葉である。もしも私が教科書だけに偏った学習や授業を行っていたとしたら，決して出会うことのできなかった言葉だ。今後も，教科書の知識を身に付けさせることにとどまらず，学びと実生活をつなぎ，実生活に役立つ英語を身に付けられる，身に付けたいと思わせるような魅力的な授業を追究していきたい。また，英語の楽しさを自ら発見し，生き生きと学びに向かう生徒の育成を目指していきたい。

引用文献一覧

・Eric ClaptonＣＤアルバム『Rush』「Tears in Heaven」, Warner Records (1992)
・ＴＥＤ「How to live before you die」,
https://www.ted.com/talks/steve_jobs_how_to_live_before_you_die (2008)
・光村教育図書サポートサイト　エデュサプリ
「英語の新しい学び方 CLIL（内容言語統合型学習）とは？」
https://edusup.jp/topic/20180316 (2022/1/11)
・和泉伸一，池田真，渡部良典「CLIL(内容言語統合型学習)上智大学外国語教育の新たなる挑戦第２巻実践と応用」上智大学出版（2012)，p.7 ℓ.19～p.8 ℓ.7

参考文献一覧

・二五義博「ＣＬＩＬを応用した二刀流英語指導法の可能性」(2014)
・太田圭「初等英語教育における部分的ＣＬＩＬを取り入れた授業実践」(2017)
・中部地区英語教育学会課題別研究プロジェクト
「言語習得からみる小中連携の英語指導－文の仕組みへの気付き・音声から文字へ・ＣＬＩＬ－」(2017)

別紙様式２

引用文献一覧

・Eric ClaptonＣＤアルバム『Rush』「Tears in Heaven」, Warner Records, (1992)

・ＴＥＤ「How to live before you die」,
https://www.ted.com/talks/steve_jobs_how_to_live_before_you_die (2008)

・光村教育図書サポートサイト　エデュサプリ
「英語の新しい学び方ＣＬＩＬ（内容言語統合型学習）とは？」
https://edusup.jp/topic/20180316 (2018)

・和泉伸一，池田真，渡部良典（2012）「ＣＬＩＬ（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第２巻　実践と応用」上智大学出版 p.7 19 行目～p.8 ７行目

参考文献一覧

・文部科学省　中学校学習指導要領解説　総則編　（2017）

・文部科学省　中学校学習指導要領解説　外国語編（2017）

・二五　義博「ＣＬＩＬを応用した二刀流英語指導法の可能性」(2014)，p.68～p.71

・太田　　圭 「初等英語教育における部分的ＣＬＩＬを取り入れた授業実践」(2017)，p.1～p.2

・中部地区英語教育学会課題別研究プロジェクト
「言語習得からみる小中連携の英語指導- 文の仕組みへの気づき・音声から文字へ・ＣＬＩＬ -」
(2017)，p.13～p.42